東北大学出版会 会報

第36号

宙

おおぞら

〒980-8577
仙台市青葉区片平2-1-1
TEL 022-214-2777
FAX 022-214-2778
www.tups.jp
info@tups.jp

2023年9月

α星

自著を語る

『「環境」の基本的な考え方 ―持続可能な循環型社会をめざして―』

西野徳三

私たちの日常生活に身近であり、なおかつ国際的な課題としても論じられる「環境」。本書はその基本的な考え方について述べたものです。

第一章の冒頭で、潜水艦の孤立した「環境」が成り立つ（艦内での活動が成り立つ）ためには、それをまわりで支える別の「環境」が必要である、と書きました。潜水艦の中で生命を維持するためには外部から空気や水や食料を調達する必要がありますし、生命を維持するうえで生じる二酸化炭素や汚物は潜水艦の外に出さなくてはなりません。このことから、環境とは、「資源（必要物）を提供してくれて、廃棄物（不要物）を受け入れてくれるもの」と考えることができます。

一つの環境は、その外界にあるもう一つの環境と相互に作用することで存在しています。自然界では多くの生命が土壌や河川といったそれぞれの環境に存在して相互作用を繰り返しています。また、私たちの体内や体表面も多くの微生物にとっては生育の場、つまり一つの環境です。体内環境に結びつく食環境が、病気や健康、また寿命の延びと深く結びついていることもわかってきました。

本書では、資源循環や土壌、健康と病気など、環境に

かかわる多様なテーマを七つの章で考え、本題から外れるトピックスは一五本の「コラム」としてまとめました。テーマの絞り込みには苦労しましたが、査読者から「抜群におもしろい読み物になっている」との評価をいただき、意を強くして書き上げることができました。

私はバイオテクノロジーと呼ばれる新たな産業が形成されつつあった昭和の終わり頃、工学部に移りました。当時多くの大学においてバイオ系学科の設立や改組が行われ、当時の通商産業省の肝いりで産官学が一体となったバイオインダストリーの組織も創設されました。当初の目的は生物の機能を用いて新たな産業を興すことでしたが、種々の環境悪化が報告されるようになると、微生物が持つ潜在能力をもって悪化を防ぐことに期待が集まりました。これらのことに関わってきた経験から、当時の環境浄化の事例なども紹介しました。

その後、環境への関心は社会的に広がり、工学部では応用の講義も増え、東北大学を定年退職して勤めた私立大学では、公衆衛生学や環境学などの講義も担当しました。また福島の原発事故の後は、放射線取扱主任者の免状を取得していた関係から、学都仙台コンソーシアム市民公開講座で放射線関連の講演を行ないました。それらの内容の一部は、がんの発生や活性酸素に言及するかたちで本書に記しました。

環境に関する知識は、様々な現象をつなげていくことでより深まりますし、新たな事実が見つかってもきます。たとえば、病院での血液検査で、最近血糖値の変動を知るためにヘモグロビン A1C（HbA1c）が用いられています。血管内で糖分とヘモグロビンが反応するメイラード反応と呼ばれる現象です（これがさらに進行すると老化やアルツハイマー病に関係すると解明されています）。古くからパンを焼いたりコーヒー豆を焙煎したりするなど食品を加熱した時に生じる香りや褐変反応と同じです。土壌や堆肥などの黒色化も実はこの現象の一つです。

植物ホルモンのエチレンは、菊作りの接触刺激時や、苗をたたいたり麦ふみをしたりすることでの健苗育成の時や、さらに盆栽作りで針金を巻いて締めつけることでも発生して種々の機能が現れます。また樹木が密集した環境下では枝同士が触れることでも発生し、自分のテリトリーを保つ役割をも果たしています。普段何気なく目にしている風景の中でも、一つの環境の下で多くの生命が様々な手段を講じて相互に作用し合い、生命を維持しようとしています。これは、地球という一つの環境下で

生きる私たち人間においても同じです。

古代文明やヨーロッパがたどった歴史とは異なり、日本は水や森の循環系を守り、土壌を主とした自然調和型文化を守ってきました。これらの内容は期せずして昨今のSDGsの考え方に合致しています。これからの時代の「環境」の問題は広範囲にわたり、中には解決が困難な問題もあります。個人が高い意識を持ってそれらに立ち向かうには、まずは基本的な考え方を理解し深めることが必要です。本書がその一助となることを心から願っています。

（にしの　とくぞう・東北大学名誉教授、専門・生物化学、一九七一年東北大学大学院理学研究科化学専攻博士課程修了）

西野徳三 著

「環境」の基本的な考え方

持続可能な循環型社会をめざして

A5判・二八四頁・三三〇〇円（税込）

β星

近代日本の進化論と宗教

クリントン・ゴダール

日本人は進化論にどう向き合ったか。

この単純な問いが本著『ダーウィン、仏教、神：近代日本の進化論と宗教』（人文書院、二〇二〇年、クリントン・ゴダール著、碧海 寿広 訳）の始まりでした。当時私はアメリカのシカゴ大学歴史学科の大学院生でした。日本近代史を専攻していたにもかかわらず、ほぼ一年間あまり日本史を勉強せず、科学史、ダーウィン、ドイツの科学哲学史などの授業ばかりを取っていました。これらがおもしろくてたまらなかったからです。アメリカの大学は、学部間の壁が薄いのです。

当時のダーウィンの個人的な印象は、「機械論的思考を自然に適用した、ドライな典型的な一九世紀のイギリス人の科学者」という感じでした。しかし、それは間違いでした。ダーウィンは、厳格な科学者でありながら、ドイツのロマン主義者の影響も受け、自然の中に美と善を見出しました。キリスト教の背景と格闘し、最愛の娘

を失い、自然界に死の創造的な力も発見しました。やがて、これが自然淘汰の理論につながっていったのです。ただし、ダーウィンは人間の進化には道徳も大きな要因であると考えていました。自然淘汰と相互扶助。破壊と美。自然はまさにヤヌスの顔をしています。神が世界を創造したと信じていた多くのキリスト教徒に衝撃を与えたのは広く知られています。

私は博士論文の研究のために京都大学に行きましたが、日本人の先輩に「日本は欧米と違って、創造説がない。だから、ダーウィニズムが問題になることはなかったよ。」と何度も言われました。欧米と異なり、日本では、進化論は何の問題もなくスムーズに受容されたとの説明が定説となったのも無理からぬことです。

しかし、調べてみると、近代日本でも進化論を論じ、進化論と宗教について議論を交わした人物がとても多くいました。その中には、仏教者の井上円了や清沢満之、キリスト教思想家の小崎弘道や内村鑑三、アナーキストの大杉栄や幸徳秋水、北一輝、京都学派の哲学者西田幾多郎、賀川豊彦、生物学者の南方熊楠や今西錦司など、日本近代思想史に名を残す学者らがいました。しかも、日本でも反進化思想が明治期からありました。一つの例を取り上げると、昭和初期に哲学者の紀平正美が文部省のために仕事をしながら教育カリキュラムで進化論を禁止させようとしました。近代日本の人が進化論をあまり反対しなかったにもかかわらず、多く議論したのはなぜでしょうか？　その論争の本質を理解するにはまず、創造説・進化説の二分論を乗り越える必要がありました。

日本では多くの議論を起こしたのは進化論の正しさではなく、進化論をめぐる他の問題でした。その中で、進化論は生存競争と唯物論を含意するかという問題が知識人の間で最も大きな問題でした。もし自然界の核心にこの闘争があるというのなら、道徳なるものはすべて無意味でしょうか？　社会とは、実のところ、利己的でバラバラの個人の集まりに過ぎないのでしょうか？　自然には物質以外に何もないのでしょうか？

従って、日本での進化論の受容のされ方は、「自然界を、心ない「生存闘争」の法則によって支配された、冷たい唯物論的な世界とする発想への、長く続く恐怖によって規定されていた。その嫌悪感は、急速な近代化によってもたらされた、社会変容に対する気がかりの反映でもあった。この恐怖感があったからこそ、多くの宗教思想家や哲学者や生物学者が、進化論に積極的にかかわるよ

う駆り立てられ、そして善や調和や美や、あるいは神聖な存在を、自然や進化の内側に見いだしていった。まさにその恐怖感の後押しのもと、日本近代思想史の少なからぬ部分が形成され、また日本人の自然観や社会観や、聖なるものに対する理解も変化したのである。[1]」

（1）『ダーウィン、仏教、神：近代日本の進化論と宗教』（人文書院、二〇二〇年、クリントン・ゴダール著、碧海 寿広 訳）一五～一六頁より引用。

（くりんとん　ごだーる・東北大学大学院国際文化研究科准教授、日本近代史）

〈人文社会科学講演シリーズ13〉
語りの力
「語り」とは何か。その機能や社会的意義などを、日本語学、日本文学、英文学、日本思想史、社会学の研究者が明らかにする。
東北大学大学院文学研究科講演・出版企画委員会　編
四六判・一七六頁・二四二〇円（税込）

γ星

周産期における医薬品使用の安全性に関する情報の創出

小原　拓

『この薬を飲んでいたら妊娠してはいけないのですか？』

東北大学病院で行っている「妊娠と薬相談外来」において、このような質問をしばしば受ける。

当院では二〇一〇年から独自の妊娠と薬相談外来を開始し、二〇一一年から国立成育医療研究センター妊娠と薬情報センターの拠点病院として、「妊娠と薬相談外来」を行っている。相談外来は、産科医・薬剤師によるカウンセリングを主体とし、主に妊娠前・妊娠中の薬物治療の妊娠・胎児への影響に関する考え方についての情報提供を行っている。相談者の約半数が妊娠前の女性である。

冒頭の質問が明確に口に出されることもあれば、内に秘めていることもあるようで、実際に相談したかったことがその点であったとカウンセリング中にわかる場合も

多い。医療従事者から適切な情報提供等が行われることによって、不安の軽減や理解の向上につながる可能性もあると考えられるが、それに足りるエビデンスはもちろん、リテラシーも不十分であると感じる。そのため、十年以上続けてきた「妊娠と薬相談外来」でこのような質問がコンスタントに繰り返されているのだろう。

日本では、過去にいくつかの薬害が発生しており、薬に対する抵抗感・不安感が強い可能性がある。また、妊娠中の医薬品使用に関しては、胎児への影響に関する漠然とした不安を抱くことは十分理解できる。しかし、薬を用いて治療をしながら妊娠に臨む・妊娠を継続することは、胎児のためにも重要である。薬と上手に付き合うためには、その必要性を正しく理解し、そのリスクについても正しい情報に基づいて解釈することが必要である。なお、本邦の医薬品添付文書において妊婦禁忌とされている医薬品の中には、十分な根拠に基づいているとは言えないものもある。

周産期の医薬品使用の安全性に関する情報を創出するためには、妊婦における医薬品使用という曝露と、妊婦のみならず出生児における中長期的アウトカムとの関連を検討する必要がある。また、特にアウトカムがセンシティブな内容を含むため、倫理的な問題を考慮した研究のデザインが必要である。

そこで、我々は、レセプトデータ・電子カルテデータ・出生コホート研究等を用いた観察研究を実施するために、様々な方法論的制約を一つずつ解消してきた。例えば、妊婦・母親と出生児のデータ上の連結、妊娠中の医薬品使用を特定するための詳細な妊娠期間（妊娠前期、中期、末期、妊娠開始日、出産日）の特定、アウトカム情報等の精度の確認などである。それらを踏まえ、ようやく臨床に応用可能なエビデンスの創出が可能となり始めている。最近、日本の添付文書における妊婦への投与禁忌が解除されたカルシウム拮抗薬の安全性情報の創出（Pregnancy Hypertens 2023 Mar；31：73-83）や、未だ添付文書上妊婦禁忌ではあるものの妊娠初期の消化管運動改善薬使用に関する安全性情報の創出（Pharmacoepidemiol Drug Saf 2022 Feb；31(2)：196-205）は、臨床現場における意思決定に有用な情報を提供できるものと確信している。

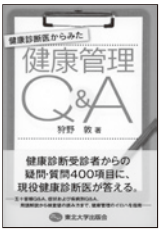
今後も、目の前の患者だけでなく、将来の妊婦およびその家族の不安に応えるため、周産期薬剤疫学研究の推進に貢献しながらも、周産期の医薬品使用に関する正し

い知識の周知が推進されることを切に願う。

（おばら　たく・東北大学病院薬剤部、東北大学大学院医学系研究科分子疫学分野、東北大学東北メディカル・メガバンク機構 予防医学・疫学部門　准教授・薬剤疫学、東北大学大学院薬学研究科博士課程修了（医療薬学博士号取得）

健康診断医からみた健康管理Q&A

狩野　敦　著



症状別に見た４００の項目から、自らの健康状態をチェック。ベテラン健康診断医の著者による、「読む健康診断」の書。

四六判・六八二頁・六三八〇円（税込）

δ星

私の本棚

現代小説と今につながる出会い

安　達　宏　昭

私の本棚はほとんどが歴史学関係の本ばかりであるが、実家の本棚の一角には一群の現代小説が並んでいる。野間宏『暗い絵』、太宰治『人間失格』、中島敦『李陵』、大江健三郎『芽むしり仔撃ち』、開高健『パニック』などである。これらの本は、私が立教高校三年生のときに自由選択の授業「現代小説」で読んだ本である。この授業を選択したのは、担当教員であった髙橋聰先生の授業を受けてみたかったからだった。

髙橋先生は、私が会計を務めていた生徒会の顧問であり、私がリーダーとなった生徒会規約の改正プロジェクトの顧問でもあった。髙橋先生の現代社会への鋭い批評の眼、そして豪放磊落な性格に、私は自分にないものを感じて憧れていたのである。

授業では、昭和初期から高度成長期までの著名な小説を、受講生が分担して報告し議論するという、まさに大

学の演習形式で進められた。私が歴史研究者になることを志望していることを知った髙橋先生は、休日に何度も髙橋先生の母校である早稲田大学周辺の古本屋まわりに誘ってくれた。そして、最後は決まって行きつけの浅川書店で先生はコーヒーを飲みながら、丸山眞男、神島二郎、色川大吉、家永三郎、藤原彰など多くの高名な学者の著書を紹介してくれた。

演習形式の授業のもとで、毎週、報告される本を読まねばならず、そうしている内に本が執筆された背後にある戦争と戦後の時代相への興味が湧き、それまでは明治期に関心があったのに、いつしか一九三〇～五〇年代の歴史を学びたいと思うようになっていた。髙橋先生が紹介してくれた近現代史の名著も、その傾向に拍車をかけた。かくして立教大学で、戦前・戦後の歴史を専門とする粟屋憲太郎教授のもとで学ぶことを決意し、そこでの学びが現在の私の日本近現代史研究に直接つながっている。まさにこれらの本が、私の進むべき道を示してくれ、髙橋先生から学問的な導きを受ける橋渡しとなった。

この本棚の一角で一際目立つのが『開高健全作品』全九冊である。現代小説のなかでも開高健が一番好きだった。開高健の作品は戦後の混沌とした社会を活力と生命力に満ち溢れているものとして描く一方で、それらのエネルギーがすべて徒労でしかないという虚しさを感じさせ、当時の私には歴史の本質を突いているように思えた。また、ベトナム戦争に従軍して戦争という人間の行為と主体を凝視する姿勢も、戦争の歴史を学びたいと思っていた私には魅力的に思えた。今から見れば、ずいぶん主観的な読みだったと思うが、歴史小説以外で読んでいて初めて楽しいと思えた作家だった。

二〇一六年冬に、中国の吉林大学外国語学院日本語学科の多くの先生方が、東北大学文学研究科に来訪し、一か月以上にわたる長期研修を行った。その一行の一人で当時副教授だった胡建軍先生（現在は教授）が開高健を研究対象にしていると聞き、私は彼を研究室に招いた。彼も開高作品に高度経済成長に向かう日本人の活力を見出しており、長時間にわたり語りあい意気投合した。これが今に続く吉林大学日本語学科の先生方との教育研究での交流の始まりだった。

そうした胡先生との関係もあり、翌年九月に中国長春市にある吉林大学で行われた日本語言文化の学会に招待されて講演をし、一週間の滞在で、胡先生と再び何度も語り合った。その胡先生の教え子が、国費留学生として

本学文学研究科日本史専攻分野の博士後期課程に入学して、現在、私の指導を受けている。

また、このときの吉林大学訪問の受け入れを全て手配してくれたのが、曾婷婷副教授だった。曾先生は林芙美子の研究をしていて戦時期に関心を持っていることや、国際交流担当だったことから、コロナ渦でも連絡を継続して、研究とともに吉林大学日本語学科と文学研究科の連携交流事業について相談してきている。

高校時代に読んだ現代小説が、私に様々な出会いをもたらし、それがいまにつながっている。あの本棚の一角は、私にとって特別な場所なのである。

（あだち　ひろあき・東北大学大学院文学研究科教授、専門・日本近現代史、二〇〇〇年立教大学大学院文学研究科博士後期課程修了）

人文社会科学の未来へ
東北大学文学部の実践
東北大学文学部　編
A5判・四〇八頁・三三〇〇円（税込）

ε星

帰郷―「若手研究者出版助成」から

帰るべき原点に支えられる

米澤　彰純

二〇〇九年に『高等教育の大衆化と私立大学経営』という単著を、東北大学出版会の若手研究者出版助成により出版いただいた。これは私の博士論文をもとにしたものである。なおこの博士論文は、すでに准教授として在職中であった東北大学大学院教育学研究科（兼務）に提出したもので、いわゆる論文博士にあたる。一九八〇年代末からの大学改革の波に乗った私は、博士課程の修了を待たずに助手に採用され、以降多くの研究プロジェクトへの参加の機会にも恵まれてきた。他方で、修士の時代から個人の研究として行ってきた日本の私立高等教育の発展のメカニズムをマクロな視点から検討しようという研究を集中してまとめることができず、苦しんでいた。そのような状況の中で当時副学長でいらした荒井克弘先生にお声掛けいただき、博士号を取得、また間を置かずに出版助成をいただいた。

私は博士論文を日本語で執筆したが、研究自体はかな

り早い時期から国際的な学術ネットワークの中で育んできたものであった。一九九二年に本書の原点となる論文を「教育社会学研究」に掲載いただき、一九九八年には信州大学の馬場将光先生に共著者として助けていただき、国際学術誌 Tertiary Education and Management に英語論文を掲載した。その後はニューヨーク州立大学の Daniel Levy 教授の国際研究者ネットワークに参加し、世界の私立高等教育研究の一端を担うようになった。しかし、緻密な実証研究を積み重ねる日本の研究アプローチと、途上国から先進国まで幅広い国際的なスコープで枠組み先行の議論を行う国際共同研究のアプローチとの間のギャップに直面し、当時そもそも英語で国際的な審査を期待できなかった日本の仕組みの中で自分の研究を学位論文として認められるか、ずっと不安な日々を過ごしていた。

このように研究者としてのキャリアの軌道を外れかけていた私を救っていただいたのが、東北大学と出版会であった。その後、本書を主な業績として名古屋大学大学院国際開発研究科の英語での教育プログラムで国内外の大学院生を相手に指導を行う貴重な機会を得た。その過程で、世界の指導的な研究者の方々と交流し、アジアの同年代や若手の研究者たちと一緒にアジアの高等教育研究の土台を築き、また私立高等教育研究の国際ネットワークにも関わり続けることができた。現在私が取り掛かっているのは、Levy 教授のグループと一緒にアジアの私立高等教育研究についての国際学術書を編集、出版するというプロジェクトである。

私が専門とする高等教育研究は、もともと現場との距離が近く、また常に変化する領域なので、ひとつのテーマをじっくりと取り組むというよりは、その時々にホットで重要なイッシューに挑むことが通常となっている。この中で、一貫したひとつのテーマを生涯持ち続けることが難しいと感じてきたが、この最初の単著は、還暦が間近に感じられるようになった現在に至るまで学術的に帰るべき原点として私を支えてくれている。幸い多くの方に購入していただき、長い間売り切れ状態となっていたが、電子書籍としての提供を検討いただいているとのことである。国内においても、ずいぶん昔のこの研究に今でも着目いただき、私学団体の代表が一堂に集まる政府の学校法人改革の特別委員会に専門家として関わる機会が二〇二二年にあった。二〇二三年に入ってからは、少子高齢化という新たな側面から、国内外の報道機関か

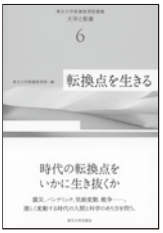
ら意見を求められることも増えてきている。二〇一六年に東北大学に戻り、現在は本部で大学の国際戦略形成に関わっているが、こうした日常の中でも変わらぬ帰るべき原点があることが、自分の人生の大きな支えになっている。

（よねざわ　あきよし・東北大学国際戦略室副室長・教授、総長特別補佐（国際戦略担当）、専門・教育社会学、高等教育研究・一九九三年東京大学大学院教育学研究科博士課程中途退学）

東北大学教養教育院叢書「大学と教養」第6巻

転換点を生きる

東北大学教養教育院　編



社会のあり方を見つめ直し、未来を創る課題に取り組む。転換点としての現代をどのように生きるかを思考する9編の論考集。

A5判・二三二頁・二七五〇円（税込）

書評

加藤道代・一條玲香編著、東北大学出版会
二〇二一年一月刊行

『東日本大震災後の子ども支援　震災子ども支援室（〝S－チル〟）の10年』

水原克敏

本書は、東北大学大学院教育学研究科の「震災子ども支援室」が、東日本大震災後の子ども及び関係する人たちへ展開した支援の記録である。最近は、日本のみならず世界でも震災や戦争などで悲惨な被害が出ているが、とりわけ子どもたちは、親や兄弟を失い家も破壊されて、絶望の淵に追いやられている。この子らに直ちに様々な側面からの支援が必要である。

大震災直後、何から始めてよいのか暗中模索しつつも同支援室は心理学的見地から、保健師、心理士、保育士そして福祉士などの専門家を糾合し、かつ、児童相談所、福祉事務所、教育委員会、県市町村と連携することで、九年半にわたって支援活動を展開した。「支援とは何か」を問いながら、展開には幾多の紆余曲折があったことを

本書は明らかにしているが、その中で、「阪神淡路大震災が遺してくれた」報告書などの資料が道標となったという。そして、その意義を深く感じ、同支援室も活動記録を、本書の形で「遺す」ことを決意したのである。

興味ある個所を紹介すると、第一章では、同支援室の運営の原則について、「今すぐの問題だけでなく、後に出てくる問題も考慮に入れる」こと。また「子どものニーズに応じて支援」し、「子どもを取り巻く大人、保護者、里親、保育士や教師などの方々も含めて支援をする」ことなどを確認している。

第二章の「相談支援」では、「電話相談」をはじめ、「訪問相談」や「来所相談」が内容である。相談員として、上記専門家三名を配置したので、相談内容によって「各々の領域の強みを活かして対応」できる利点があった。対応の多くは、相談者の置かれた状況を一緒に整理する「状態整理」と援助先の問いに応える「援助資源の紹介」などで「受容的、共感的姿勢」を基本にしつつ、時には「積極的な指示や質問、課題を与え」たという。

第三章「親族里親」サロン・第四章「遺児家庭」サロンは、当事者の悲しみが深く、涙なしには読めない章である。里親制度は、「家族と暮らせない子どもを家庭で養育する社会的制度」で、「震災孤児」らの多くは、「祖父母やおじ・おばなどの親族に引き取られた」。里親たちには、近所の人には話せない苦労を出し合える場が必要という判断で出発したが、里親たちは、容易には越えられない深い「喪失感」があった。実は、里親自身、身内や親族を失い家財も仕事も奪われるなど、被災への恨みや悲しみに襲われており、それでも孤児の里親を引き受けることを決心した人たちである。だから、サロンに参加しても「人によっては話さず、ただ泣いて帰る」こともあったという。それでも同支援室の努力によって、サロンは意義ある役割を果たすようになったのである。

第五章の「遺児・孤児学習支援しゅくだい塾」も、興味深い企画である。東北大学の学生が、現地に出向き、「子どもたちが教えてもらいたいと思う学習内容に合わせて、一対一の個別学習」を支援した。それは学習だけでなく友だち作りや保護者の息抜きの時間ともなった。「同じように頑張っている仲間」と共に「自分の勉強、自分の学びをする点が、普段とは違って」「様々な体験を子どもたちに」もたらしたと評価できる。

以下、紙数の都合上、割愛せざるを得ないが、第六章支援者へのストレスマネジメント支援と研修支援、第七

章　会議・事業運営協力「南三陸町子ども支援連絡調整会議」、第八章　心理士派遣、第九章　次世代への継承、第十章　震災子ども支援の十年間―結びにかえて、付記・資料（相談データ、文献レビュー、報道一覧）という内容が続く。来るべき大震災への対応のために、ぜひ、多くの人に一読してもらいたい活動報告書である。

（みずはら　かつとし・東北大学名誉教授）

加藤道代・一條玲香　編著

東日本大震災後の子ども支援

震災子ども支援室（"S-チル"）の10年

「支援」とは何か。震災後、様々な活動を通して震災遺児・孤児と被災家庭を支え続けた支援室の歩みと成果。

A5判・一八二頁・二四二〇円（税込）

東北大学出版会だより36

η星

災害科学と書物

栗山進一

東北大学災害科学国際研究所では、東日本大震災から十年の節目である二〇二一年月に編著『東日本大震災からのスタート　災害を考える51のアプローチ』を東北大学出版会より上梓し、同書において、東日本大震災が明らかにした問題・その後十年間の進展・今日も残る課題を総括して、発災前の備えの重要性と創造的復興「Build Back Better」の議論を行っている。私は、二〇二三年四月より災害科学国際研究所の所長を拝命した。同研究所の使命は、世界が必要とする災害科学の知の創造と蓄積に貢献し、得られた知見をすみやかに発信してローカルかつグローバルに実践していくことである。

私は、自分の専門分野の知見を活かし、災害科学を深化させていきたいと考えている。私は公衆衛生学を専門としてきた。「公衆衛生学とは、組織的な社会の努力を通じて疾病を予防し、寿命を延伸し、身体的、精神的、社会的健康を増進させ、リソースのより効果的かつ効率

的配分の増進を図る科学であり、技術である」といった定義がしばしば用いられる。すなわち、公衆衛生学とは、「小さなコミュニティから国全体に至るまで、人々の集団の中で病気を予防し、健康を増進させることである」、と言える。医学では一人ひとりに向き合い、その病いやケガを治療する。一方、公衆衛生学では、数十人～数億人の病気やケガを予防し、健康を維持・増進する。

私はこの公衆衛生学を防災に当てはめたいと思ってきた。つまり公衆衛生学の「病気」の部分を「災害」に置き換えたいと考えたのである。私の専門の公衆衛生学では、特に生活習慣病の予防において成果を挙げてきた。そこで実感されたのは、いくら頭でわかっていても、人はそう簡単には禁煙や減塩、バランスのいい食事をとるといったようには行動を変えないということである。同様に防災においても、どのようにしたらいいのかに関する知識がある場合でも、例えば地震であれば建物の耐震化や家具の固定、警報が出た際にすぐに避難するなどの知識であるが、それを実行している人は未だに限定的である。いくつかの調査によると、「わかってはいるけど具体的な防災対策をやっていない」という人は、五〇％を超えている。

では、どうすればいいのだろうか。講演会やシンポジウム、ＳＮＳの活用、メディアからの情報発信などは非常に有効であるが、さらに工夫が必要と思われる。公衆衛生学では、野菜を食べてもらうため、ポパイというアニメを利用している。ポパイはホウレンソウを食べることでやたらと強くなる。これを見た子どもたちは、より多くのホウレンソウを食べることになるであろう。また、「三匹の子豚」というお話をご存じであろうか。このお話では、子豚の三兄弟がそれぞれ家を建てる。一番上の兄は、わらで家を建てる。その家は狼の息によって簡単に吹き飛ばされる。二番目の兄は、木で家を作る。これも簡単に吹き飛ばされる。三番目の子豚は、永い時間とコストはかかったものの、レンガで家を建て、狼の息では吹き飛ばなかった。このように、しっかりとした備えをすることの重要性は、アニメや物語にすることで、永くながく伝承してもらうことができる。

私は公衆衛生学の手法を防災に応用し、無関心な方、わかってはいるが防災行動を実践できない方に、いかにして意識改革と行動変容をしていただくか、言うなれば「防災コミュニケーション学」といった学問の確立と実践を行いたいと思っている。

このような防災コミュニケーションに関する書物が増えることを大いに期待している。災害科学は被災された方々、今後被災されることが想定される方々に裨益する実践がすべてである。公衆衛生学の英語での定義は、「Public health is a science and art…」とされるが、災害公衆衛生学の英語での定義は、災害科学の実践面を考慮すると、「Disaster public health is a science and heart…」となろう。こうした点に関しても、書物としてまとめられることを期待している。

（くりやま　しんいち・東北大学災害科学国際研究所所長・教授、災害公衆衛生学・分子疫学）

東日本大震災からのスタート

災害を考える
51のアプローチ

東北大学災害科学国際研究所　編

B5判・二三四頁・三三〇〇円（税込）

科研費による出版を承ります

科学研究費助成事業の「研究成果公開促進費（学術図書）」を利用した出版をご検討の際は、ぜひ小会事務局までお声がけください。「見積書」「発行部数積算書」の作成を承ります。

〈実績例〉

★令和三年度

滝波章弘著『地域が創る「あさか舞」―福島県郡山ブランド米の産地像―』

★平成三〇年度

西田文信著『ナムイ語文法の記述言語学的研究』

髙橋美能著『多文化共生社会の構築と大学教育』

高橋秀太郎・森岡卓司編『一九四〇年代〈東北〉表象―文学・文化運動・地方雑誌―』

★平成二九年度

尾園絢一著『パーニニが言及するヴェーダ語形の研究―重複語幹動詞を中心に』

学術出版をお考えのみなさまへ

専門書、教科書、教養書、入門書、学会へのプロシーディングなどの出版をお考えの方は、ぜひ小会宛にご連絡ください（連絡先は表紙面参照）。日本学術振興会科学研究費補助金や東北大学若手研究者出版助成の申請などを含め、ご相談を承ります。

編集委員会から

この「宙（おおぞら）」第三十六号の七星の文章は、それぞれ個別のお願いに応える形で寄稿していただきましたが、いずれの内容にも、学術、文化にかかわる深い問いが込められています。「多様な生命活動の持続を支える環境とは―」、「進化論の受容を通して明らかになる自然観とは―」、「周産期の医薬品使用の安全性についての正しい知識とは―」、「現代小説が歴史学研究に及ぼす活力とは―」、「国際化する高等教育研究のあるべき針路とは―」、「震災後の困難な状況における有意義で実現可能な子どもの支援とは―」、「防災の意識と対策を高める実践知とは―」という、根源的な問いにもとづくかけがえのない「知」が一堂に会する、とても充実した内容になりました。御執筆くださったみなさま、ありがとうございました。

東北大学出版会は、今からちょうど十年前の二〇一三年に、前年の春に開始した『今を生きる―東日本大震災から明日へ！　復興と再生への提言―』全五巻（「1 人間として」「2 教育と文化」「3 法と経済」「4 医療と福祉」「5 自然と科学」）の刊行を、多くのみなさまの御協力を得て、貫徹することができました。東日本大震災の被災地にある東北大学には、この震災からの復興と再生に寄与する責務があると考え、東北大学の内外の幅広い分野の方々の「知」と思いを集めて、震災後の社会に向けて発信した企画です。この叢書の企画を発案し実現させた志を、よりよい「明日」のためにさらに育み、活かしてゆきたいと思います。「今を生きる」ことは続きます。これからも、みなさまのかけがえのない「知」を世に発信するための出版の企画をお寄せください。お待ちしております。

（佐倉由泰）

宙（おおぞら）に輝く北斗の七つの星に寄せて、東北大学出版会が読書人に贈るエッセー　第三十六号

内容

α星　自著を語る／『「環境」の基本的な考え方―持続可能な循環型社会をめざして―』／西野徳三（東北大学名誉教授）

β星　近代日本の進化論と宗教／クリントン・ゴダール（東北大学大学院国際文化研究科准教授）

γ星　周産期における医薬品使用の安全性に関する情報の創出／小原拓（東北大学病院薬剤部、東北大学大学院医学系研究科、東北大学東北メディカル・メガバンク機構准教授）

δ星　私の本棚／現代小説と今につながる出会い／安達宏昭（東北大学大学院文学研究科教授）

ε星　帰郷―「若手研究者出版助成」から／帰るべき原点に支えられる／米澤彰純（東北大学国際戦略室副室長・教授、総長特別補佐（国際戦略担当））

ζ星　書評／加藤道代・一條玲香編著、東北大学出版会、二〇二一年一月刊行『東日本大震災後の子ども支援―震災子ども支援室（〝S－チル〟）の10年』／水原克敏（東北大学名誉教授）

η星　東北大学出版会だより36／災害科学と書物／栗山進一（東北大学災害科学国際研究所所長・教授）